

# 作並こけしの源流と変遷

第五回三土新明会

六月二十一日



こけしと言う名称とも関係にある

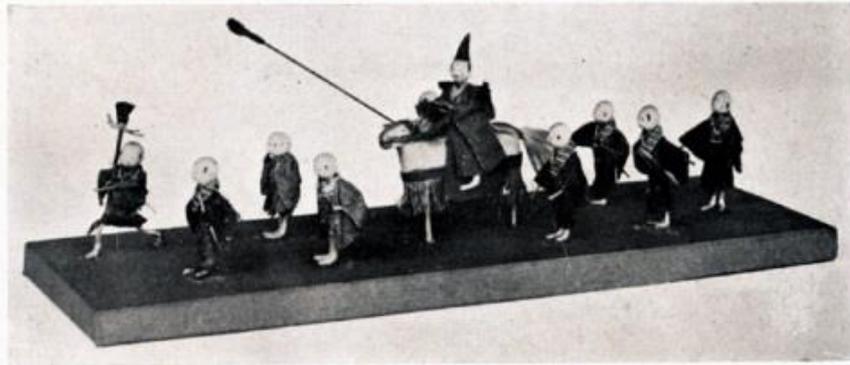
芥子人形とはなにか・・・



「早くは雍州府志から、幕末の書物にわたって、芥子人形といふのがみえる。芥子人形は広く行われ、寛永二年五月豊竹座上演の金屋金五郎後日雛形の舞台の図を見ても、人形屋の店先に『萬人形屋 ひいな色々 けし人きょう はたか人形 いしょうきせ品々あり』の如く見え、裸人形とともにありふれた人形であったらしい。芥子人形といふ言葉は多少意味を違って用ひたやうであるが、小さい人形といふ意味に用ひたのは同じである。小さいといっても、江戸時代の人形は概して大手であったので、極小といふ意味ではない。」  
〈山田徳兵衛・日本人形史〉

雍州府志

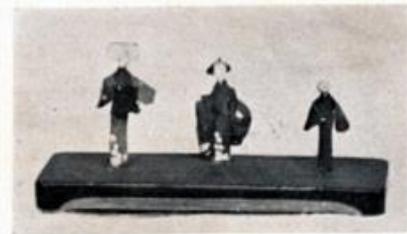
貞享3(1686)年に刊行された山城国についての最初の総合的・組織的な地誌



形 人 子 芥 屋 澤 七



形 人 子 芥 政 文



形 人 子 芥 政 文

芥 子 人 形

芥子人形の発祥は決して新らしくなかつた。「好色一代男」には「小箱をさがし芥子人形云々」とあり、「傾城風流杉盃」江戸巻にも「あやまりて芥子人形の頭を耳の中へ入……ほそき管の先にふきやのごとき紙を付御耳へさしこみをきくだの木口よりげし人形のあたまをすひ付」と見えるので享保以前に行はれてゐた事は疑義がないが事実上流行したのは寛政以降であつた。

有坂與太郎「玩具叢書」(日本玩具史篇)

芥子人形の発祥は決して新らしくなかつた。「好色一代男」には「小箱をさがし芥子人形云々」とあり、「傾城風流杉盃」江戸巻にも「あやまりて芥子人形の頭を耳の中へ入……ほそき管の先にふきやのごとき紙を付、御耳へさしこみをき、くだの木口より、けし人形のあたまをすひ付」と見えるので享保以前に行はれてゐた事に疑義がないが、事実上流行したのは寛政以降であつた。

傾城風流杉盃

目錄 江戸之卷

才一谷子人歌れびむと音え

まんまうまん  
堂竜おまろく

二らやうまはあむむ

仲よしのり

傾城風流杉盃

才二世よりいほなぼのらうお

ゆらうぬいのむゆゆ

常んごゆゆ

まゆれあづや

死のなま邪魔のふまふ

「傾城風流杉盃」江戸の巻

宝永二年 (1705)

「御芥子人形包紙・人形」ライデン国立民族学博物館蔵



4692

箱根  
湯本  
挽物店



箱根名品挽物細工

街道湯本村あり、花美なる諸品を細工して、色々彩り塗りて店前に飾る。また雛の芥子人形の細工をしおらしくして、わずか方寸の箱に百品二百品も入れるなり。湯本伊豆屋の店諸品多し。

関門七律  
 関門百里倚龍巖、十二東秦車轍通。  
 天、色幾餘黃霧、外人一家半住白雲中。  
 湖、分銀漢星、衣湛峯並芙蓉、水雪同雄。  
 一自終軍棄繻、入于今士氣此間雄。

梅の花  
 燕村  
 九裡  
 貞一



## こけし発生の三条件

- ①木地師が温泉地に定住して、湯治客の需要を直接感じられる。
- ②赤物が伝えられる。⇒ 木地に染料で色を付ける
- ③湯治習俗が一般農民に一種の再生儀礼として定着する。

### 赤物とは何か

赤物というのは赤い染料を使った玩具や土産物のこと、赤は疱瘡(天然痘)から守るあるいは魔を除けるといってこの赤物を喜んで買い求め、子供のもてあそび物にした。



鴻巣の赤物

木地玩具の赤物は箱根・小田原が先進地



伏見土人形



## こけし発生の三条件

- ①木地師が温泉地に定住していて、湯治客の需要を直接感じられる。
- ②赤物が伝えられる。⇒ 木地に染料で色を付ける
- ③湯治習俗が一般農民に一種の再生儀礼として定着する。



- 土湯
- ① 正徳、おそくても文政10年以前に、温泉地に木地師はいた。
  - ② 佐久間亀五郎により小田原・箱根より伝えられる
  - ③ 湯治客も土湯街道を往来する人も多くいた
- 遠刈田
- ① 温泉地に近接した新地には延享年間ころに木地は伝わっていた。  
(延享元年(1744)の氏子駆帳に八宮、横川が応じている)
  - ② 赤物の直接の伝承の記録・聞き書きはない(文政6年と8年の金毘羅碑がある)
  - ③ 湯治客も遠刈田温泉に多く入っていた。
- 作並
- ① 南條徳右衛門(享和元年(1801年)生まれ)が木地を挽き始めた。
  - ② 南條徳右衛門自身が箱根より伝えた。
  - ③ 湯治客も作並に多く入っていた。
- 鳴子
- ① 小田原の木地師が天保年間に鳴子にやってきて木地を伝えた。
  - ② 小田原の木地師自身が伝えた。
  - ③ 湯治客も鳴子に多く入っていた。

岩松直助文書

万延元年 (1860)

高橋五郎さん発見

夫木地挽者  
維高親王始而  
於函根 御癸  
業為被有而  
後我師南德  
翁有相傳  
而予亦令汝

南條徳右衛門のこと

相傳此天下之  
秘業也努力  
他見他言有間  
敷者也

付此業ヲ知者予  
兄弟羽前ニ人  
汝ト共四人

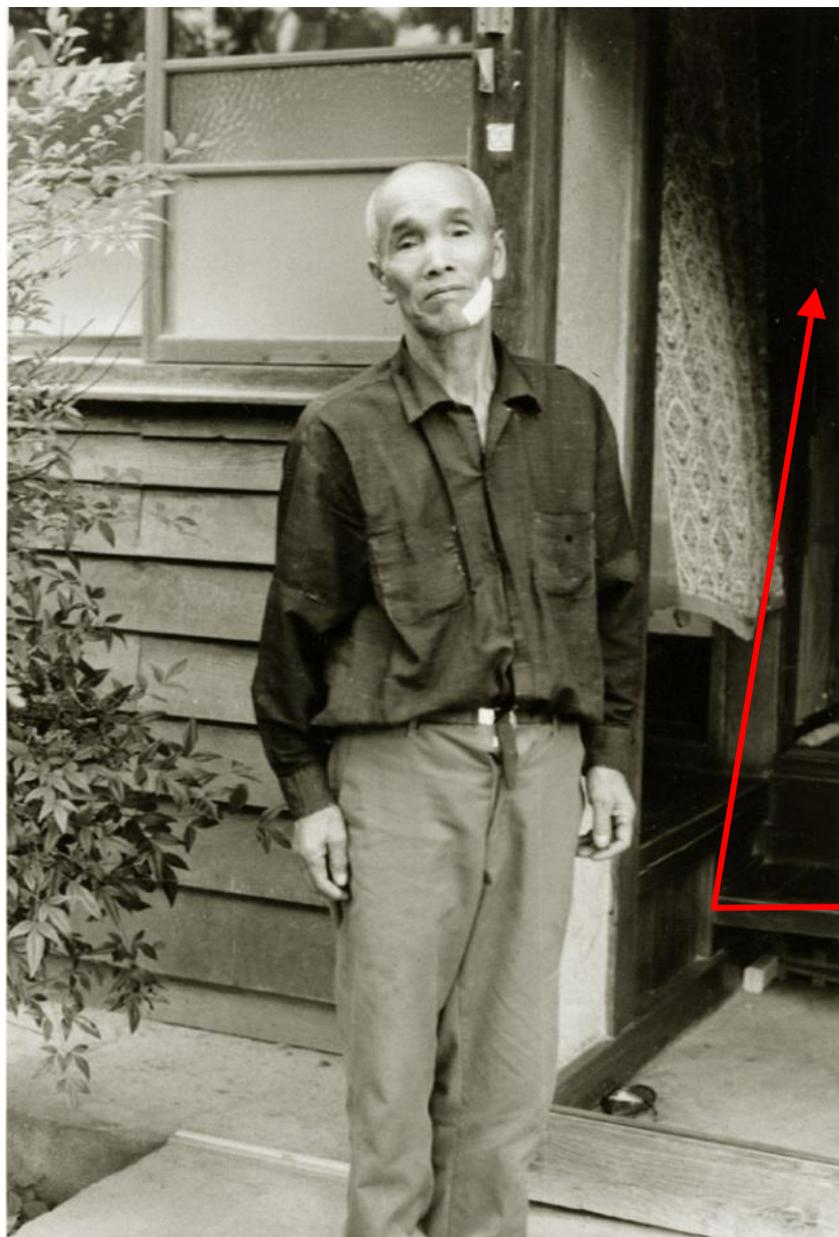
右之通令相傳

候畢

岩松直助

万延元年  
申正月

小松藤右衛門友



鹿間・橋本

「仙山紀行」の旅

木の花 第4～7号

昭和46年9月

茅沢の今野多利之助訪問  
発見は赤と青の染料箱のみ

高橋五郎さんの発見  
昭和56年12月10日

岩松直助文書は  
この玄関正面の  
神棚の上の真っ黒な  
木箱の中にあった

麻生政治改名  
岩松直助  
明治七甲年  
長安良道信士  
五月廿二日  
羽後秋田雄勝郡  
三梨村出生  
行年四十七才

A

岩松直助

(梵) 秋岸妙音信女  
天保八丁酉年  
九月十二日

E

嘉永四亥年  
積雪道信士  
十一月十四日  
完上観音当村  
庄作

F

嘉永二酉年  
(梵) 郎翁道夏信士  
閏四月十七日

C

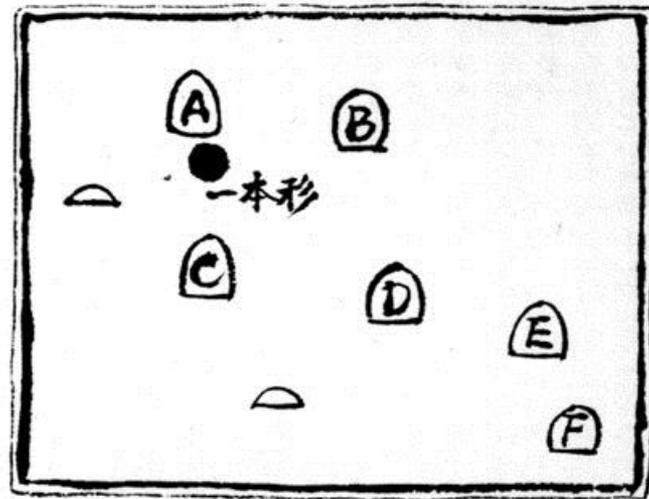


嘉永三庚年  
積春翁信士  
二月廿日  
庄吉

B

慶応元年  
(梵) 忠翁夕義信士  
十月八日  
六十五才

D



南條徳右衛門

作並温泉  
一本杉の墓地

作並温泉一本杉墓石群



孝太郎と小林家記録書

樋口 達也 さん撮影

# 當家業、因記

吾カ養父九十治ナル人明治初年以前業ヲ  
宮城縣作並ニ營ミ爾來父業ヲ續キ明  
治元年当山形ニ来リテ開始シ以來當今  
ニ及ブ時勢、變遷アリト雖モ純ク社會、要  
求ニ明ク本業、佳トシル所益ク勤メザルベ  
カラジ又勵マザルベケンヤ

以後余輩、相續クニ及ビ明治參拾年未  
當家就業者中舎弟及ビ姪弟共拾  
貳人能ク其業ヲ守リ卒業、後ト雖モ  
克ク蕨、本分ヲ盡シテ業ニ服シタルモノ左  
ニ成績ヲ擧ケテ以テ將來、鑑ミトス

明治四拾五年四月錄ス

作並

南條徳右衛門

明治7年5月22日没

岩松直助

岩松直治

明治11年9月12日没

明治10年5月10日没

西南戦争戦死

岩松直治舎弟

南條九十治

此業を知る者は予が兄弟羽前に二人  
汝と共四人

仙台

高橋胞吉

戸籍名 今朝右衛門  
天保9年年3月27日生まれ  
明治22年4月1日没

折立

茅沢

安政6年年  
3月21生まれ

小松藤右衛門

庄司惣五郎 | 今野新四郎

安政元年年2月27生まれ

愛子

榎田與左衛門

作並

万延元年年11月6日生まれ

作並

平賀謙蔵

弘化2年11月23日生まれ

小林倉治

小林倉吉

小林清蔵

山形

# 作並こけしの誕生（推定）

- 享和元年(1801) 南條徳右衛門 小田原付近に生まれる  
箱根湯本の木地屋について木地を学ぶ
- 文政8年頃(1825) 南條徳右衛門(25歳頃)東北へ移り作並に落ち着く  
岩松旅館(先代喜惣治のころ)の地内で営業
- 文政11年(1828) 麻生政治 秋田県雄勝郡三梨村に生まれる
- 天保9年(1838) 小松藤右衛門(今朝右衛門) 愛子にうまれる
- 天保末年 飢饉の後、秋田雄勝郡より麻生政治が作並に来る  
岩松の地内で南條徳右衛門に木地を習う  
兄弟弟子が他に二名いた  
麻生政治 名を岩松直助と改める
- 弘化2年(1845) 小林倉治 山形市旅籠町に生まれる
- 嘉永初年 直助以外の弟子二名は羽前(山形)に移る
- 嘉永5年頃(1852) 小松藤右衛門 岩松直助の弟子となる
- 万延元年(1860) 小松藤右衛門 相伝書を直助より受ける  
小林倉治 作並の直助の弟子になる  
(山形旅籠町に居た直助兄弟弟子九十治の紹介)

この期間のいつ頃か、こけしは生まれた

岩松直助文書

万延元年 (1860)

高橋五郎さん発見

小 龍 頭 長サ五才  
 道 渡リ六才  
 相 頭 長サ五才  
 道 渡リ七才  
 中 頭 長サ五才  
 道 渡リ七才

大 龍 頭 長サ五才  
 道 渡リ六才  
 大 龍 頭 長サ五才  
 道 渡リ七才



作並

芋沢

愛子

折立

秋保

大崎八幡

### 山形・作並こけしの研究

#### 「作並系」提唱

昔から熊沢系なり遠刈田系なりの名で一括されていた、山形・米沢・作並をこれに併せこけしは、タイプの遠刈田と比較すると、かなりの差違を有する。そして、仙台こけしの代表たる高橋熊吉と山形の其たる小林倉吉とを並べてみると、その形制的紋様の傳統の類似に驚かされるのである。

#### 特徴

胴が細く、頭は大きく、数寸以下の小寸物では立たない位に不安定であり、大寸物(標準型)では肩が張り、場合によっては顔開きとなる。頭のがらは遠刈田新地ほど極端に拡散しない。場合によっては鳴子こけしに似て顔が丸い。胴の花は新地や蔵王高湯や討折よりは、はるかに變化に富み、自由奔放で、菊花紋様にとらわれていない。肥吉、倉吉ともに、良い例で牡丹とも桜とも解される。要するに、新地ほどの伝統的東舞が見られない。花自体も大ぶりのが多い。



(左) 尾集 八  
小林吉三郎  
小野實  
小林倉吉  
約木安太郎

#### 発生

山形の小林一族を中心として発生分布したのは、山形・米沢、寒河江、天童、作並等のもので、これらは明かに一連のものであるから、小林倉吉の家系とこけしの関係を調べれば良い。倉吉の父倉治は高橋清蔵の次男で、七八歳の頃に作並の木地師熊吉九十治の養子となり、二十歳の頃山形に歸った。高橋清蔵は先代堀原倉吉の代より山形藩の御用商人であり、木地初代は倉治であるが、そのこけしは米沢に判らない。とににか山形の源流は作並であり、作並は昔から、仙台藩の御用木地師が住んでいた所である。したがって、作並と新地との関係になるが、或点、作並は新地よりも古い。新地は寶暦以後に開かれているが、作並には既に元和年間、仙台藩御抱木地師新國掃部が、養子より移住して来ており、仙台と作並との往來は相當であったと思われ。肥吉の先代は天保の頃、会津より仙台に移り御抱木地師となった。この場合、伊達漆器の絵下製作という本業の傍、祭日などに

玩具を作ったのであらう。掃部は京都で修業しているが、肥吉のきぼこは、先代より引きついでものか、作並あたりで修業したものかそのあたりが一切不明である。いづれにしても、この系統源流は作並であり、仙台、山形を結ぶ作並街道がその展開舞台として意味を持つてくる。あえて、作並系として獨立させるのは、その発生が、新地よりも、むしろ古く、別個に発達したようであり、形態も違ふからである。

#### 羽前木地業とこけし

羽前北部は鳴子系木地業の影響があるが、南部とくに米沢藩領であった東西兩の置賜郡の木地業は熊澤系などの木地師が七ヶ洞街道をへて流れこんでいると思われる。羽前木地業は陸前と同様に古いのであるが、冷害不況のたびに木地部落が動搖し温泉地や城下町との関係或は漆器との関係が発達しなかった。比較的早く農業や商業に轉向してしまい、温泉地土産としての、こけしが発達するようになつた頃には、それらを産むよりも、他國より移入する方に行つてしまった感がある。奇異に思われるのは、庄内地方に土着の古い、こけしが発生していないことである。相良人

<こけしの郷愁・11>昭和30年3月

<こけしの郷愁・11>で鹿間時夫が「作並系を提唱」した。  
それ以前には、作並や山形のこけしは、  
熊沢系あるいは遠刈田系の中にひとくりにされていた。



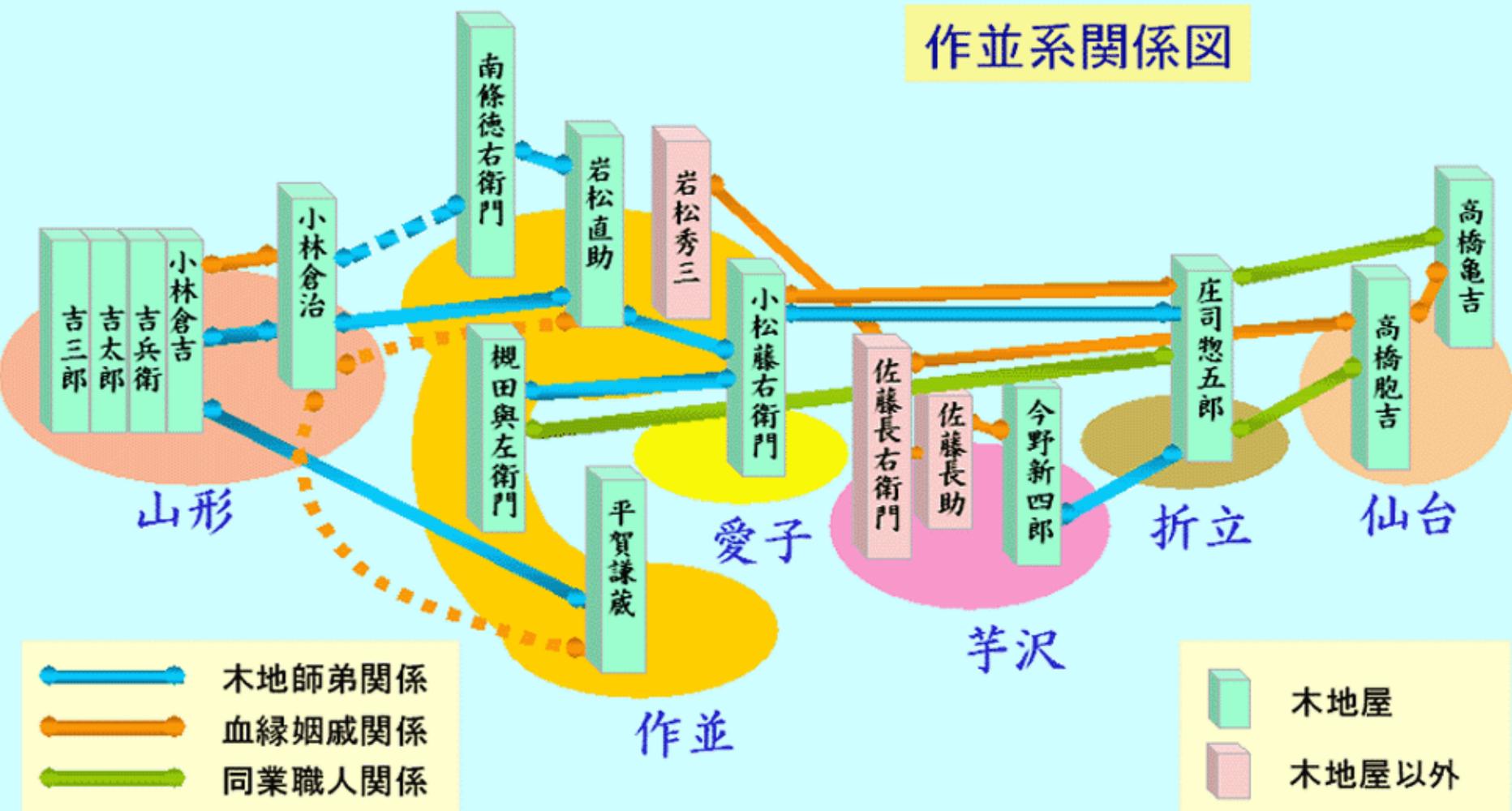
仙山紀行取材  
茅沢付近  
昭和46年9月



山形・作並―特集

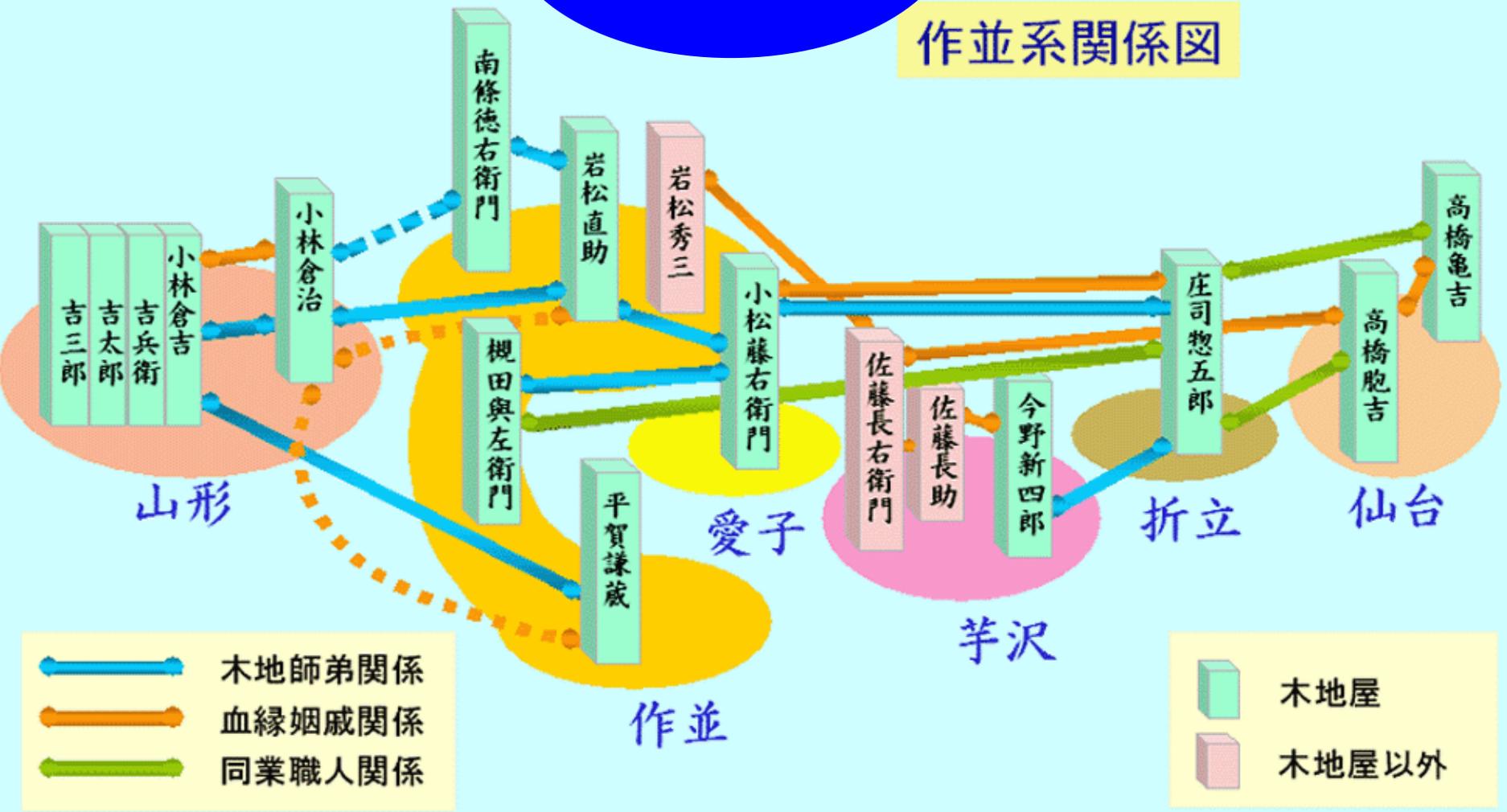
第十一册 昭和三十三年五月

# 作並系關係圖



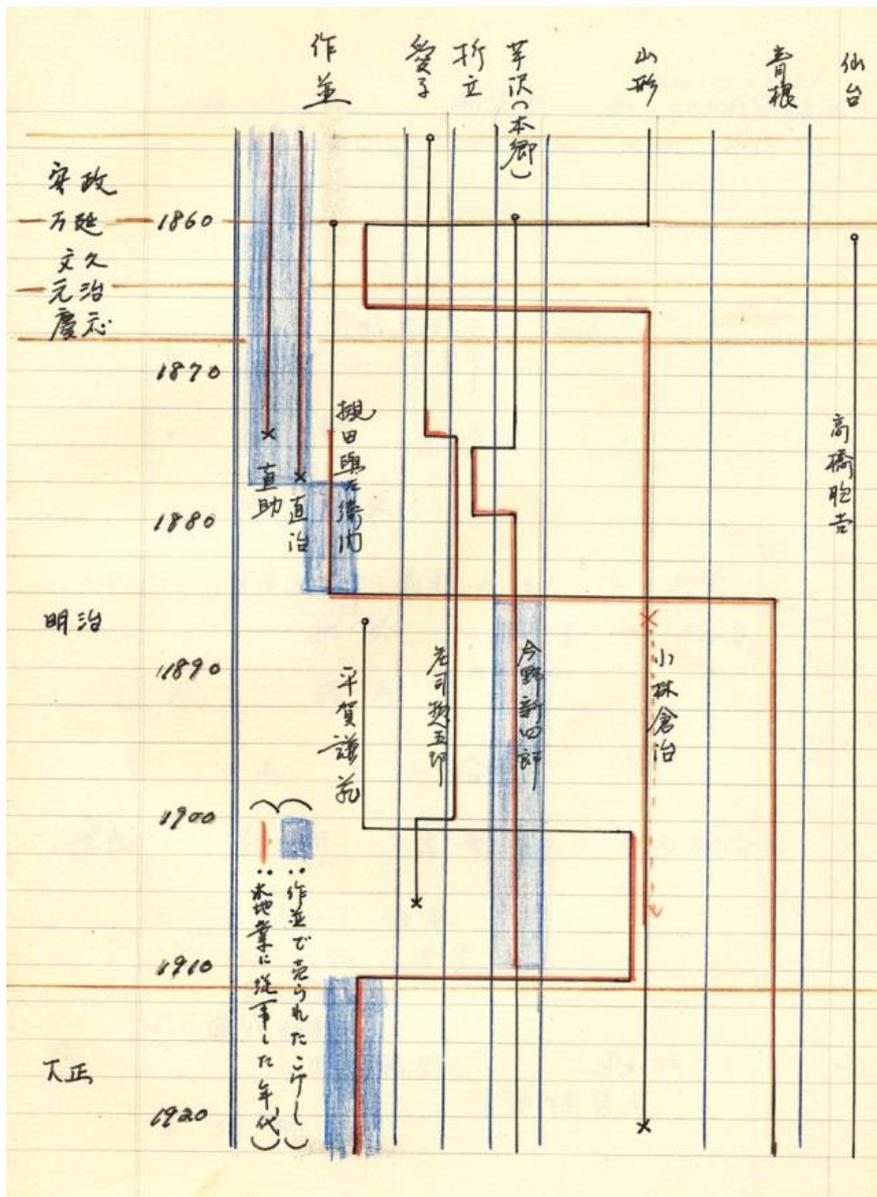
# 湯主岩松

作並系關係圖



- 木地師弟關係
- 血緣姻戚關係
- 同業職人關係

- 木地屋
- 木地屋以外



こけし山河執筆のために作った4次元年表

こけし山河

第17号 (47・9)

### 岩松直助と作並木地業

橋本正明

現在こけし系統論において最も重要な研究課題の一つは作並系の系統発生問題であろう。木地の系譜、こけしの発生あるいは伝承、題吉の位置付け等基本的な問題が議論の出来ないまま残されている。系統名でさえ、作並系であったり、山形系、山形作並系と諸説がある。こうした問題を扱うには、まず資料をできるだけ多く収集し、それを重要度、信頼度という点から整理する必要がある。またこうした実証的作業に併行して系統の発生構図を構築するという理論的作業を同時に進めなければならぬ。実証的作業においても作並の場合は研究の対象となる年代が幕末から明治一〇年頃になるため

従来の圖書中心の調査方法には限界があり、どうしても近世地方史研究の方法論が導入されなければならないだろう。ここでは、こうした展望にたつた研究の第一歩として岩松直助に関する資料を整理し、岩松の木地的性格を考える事にしよう。

まず従来の文献より、木地師岩松関係の既往資料を整理すると次のようになる。

- 一、作並には岩松徳右衛門・直助・直治という木地師がいた(海・三三、郵藝・一一、手帖・一〇、三三、ガイド、追記)しかし、徳右衛門・直助・直治の関係については、父子、兄弟等諸説ありさだかではない。
- 二、山形の小林倉治は、徳右衛門あるいは直助に師事し、直助没後残された長女つるを養女として山形へ連れ帰った。つるは後年、作並の平賀太五郎の後妻となった(手帖・三三)。
- 三、直助は大沢村龍根の伊達公御抱木地師小倉氏の五代目を後継した木地師(手帖・四八)あるいは大沢村龍根の木地師に弟子入り見習いした木地師である。しかし、龍根即ち龍ノ上の仙台藩御抱木地師は新家のみであるから直助は新家より木地の伝承を受けたと考えられる(手帖・六八)。
- 四、岩松直助は秋田から来た木地師で、湯元岩松旅館

- 109 -

こけし山河第17号 (昭和47年9月)

		山形	作並	愛子	折立	芋沢	秋保	青根
		小林倉吉 小林倉治	槻田与左衛門 岩松直助 南條徳右衛門 平賀謙蔵	庄司惣五郎 小松藤右衛門		今野新四郎	太田庄吉	
文化	1804							
	1805							
	1806							
	1807							
	1808							
	1809							
	1810							
	1811							
	1812							
	1813							
	1814							
	1815							
	1816							
	1817							
文政	1818							
	1819							
	1820							
	1821							
	1822							
	1823							
	1824							
	1825							
	1826							
	1827							
	1828							
	1829							
	1830							
天保	1831							
	1832							
	1833							
	1834							
	1835							
	1836							
	1837							
	1838							
	1839							
	1840							
	1841							
	1842							
弘化	1843							
	1844							
	1845							
	1846							
	1847							
嘉永	1848							
	1849							
	1850							
	1851							
	1852							
	1853							
安政	1854							
	1855							
	1856							
	1857							
	1858							
	1859							
万暦	1860							
文久	1861							
	1862							
	1863							
	1864							
元治	1865							
慶応	1866							
	1867							
	1868							
	1869							
	1870							
	1871							
	1872							
	1873							
	1874							
	1875							
	1876							
	1877							
	1878							
	1879							
	1880							
	1881							
	1882							
	1883							
	1884							
	1885							
	1886							
	1887							
	1888							
	1889							
	1890							
	1891							
	1892							
	1893							
	1894							
	1895							
	1896							
	1897							
	1898							
	1899							
	1900							
	1901							
	1902							
	1903							
	1904							
	1905							
	1906							
	1907							
	1908							
	1909							
	1910							
	1911							
大正	1912							
	1913							
	1914							
	1915							
	1916							
	1917							
	1918							
	1919							
	1920							

} こけしの誕生

①~④

作並で売られた  
こけしの作者

①

②

③

④

槻田与左衛門

槻田与左衛門

庄司惣五郎

今野新四郎

今野新四郎

太田庄吉

槻田与左衛門

寛政八年に、岩松喜惣治が仙台藩の許しを得て開湯に着手した。道路と設備を整えるのに八年を要したという。広瀬川の左岸（東岸）にある現在の鷹泉閣岩松旅館の前身である。

湯主 岩松

明治10年11月6日没55歳

岩松喜惣治 — 喜蔵

つま

明治11年12月17日没31歳

喜惣治

安政6年8月13日生まれ

亥之助

よふ

喜蔵

喜一

ふく

豪一

ちさと

亥之助

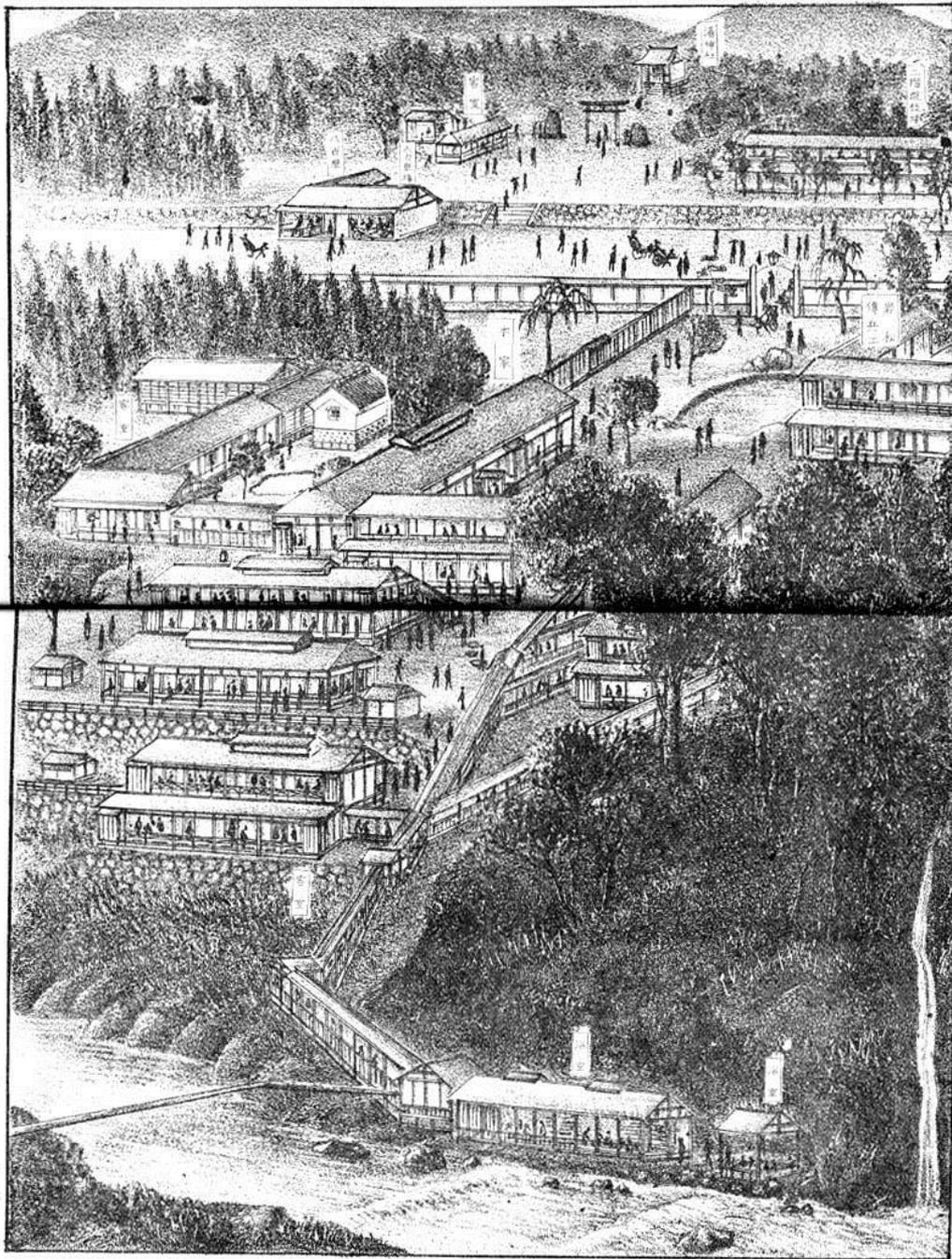


景真ノ並作

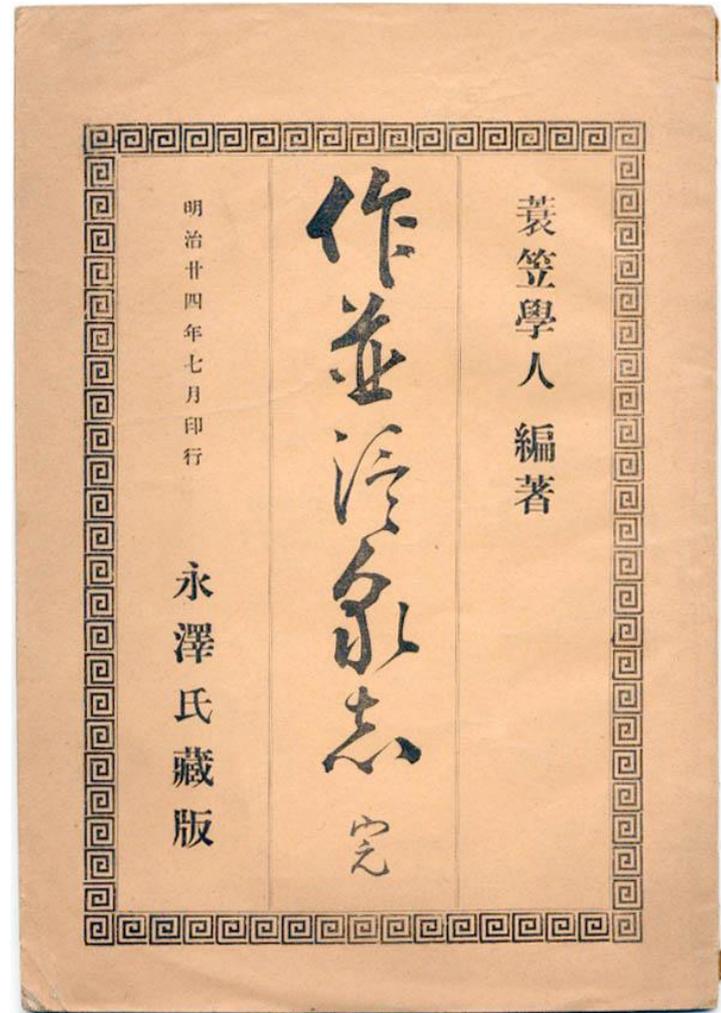


明治15年10月出版 有田正誠編輯

陸前國作並温泉場岩松ふり浴客真景



仙谷分町丁 誠實印刷所其此

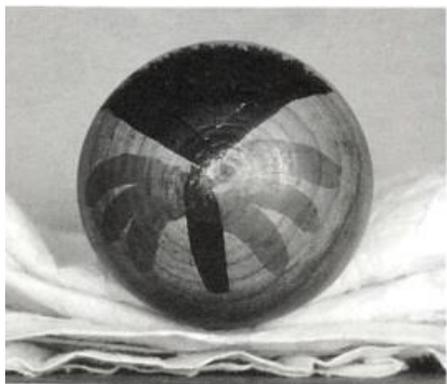


明治24年7月印行  
菘笠學人編著



作並古こけし

明治三十九年十一月の京都市岡崎町博覧会館に展示写真  
明治四十年三月発行の京都教育会会報「こども博覧会記念号」



右、頭頂



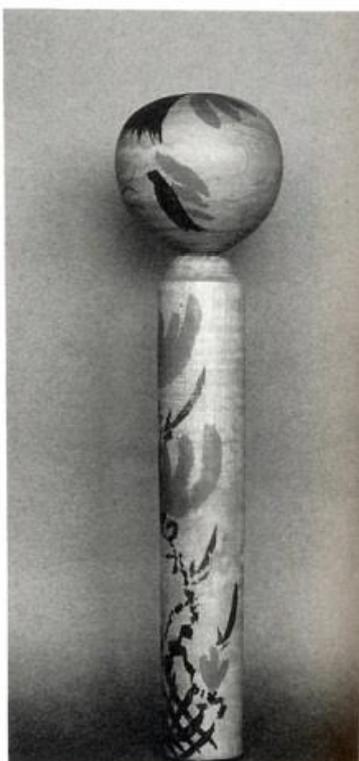
「作並不明」頭部



作並古こけし



右側面



左側面



# 菊籬



## 「飲酒」 第五首 悠然望南山 陶淵明

結廬在人境 而無車馬喧  
問君何能爾 心遠地自偏  
采菊東籬下 悠然見南山  
山氣日夕佳 飛鳥相與還  
此中有真意 欲辨已忘言



# 山形に残る菊籬の痕跡



吉太郎

安太郎

広三

# 華の冠



小林一家吉太郎



頭頂の華を  
「華の冠」と称して  
装飾化する様式



高橋胞吉こけし

「華の冠」 頭頂の華は  
意外なところまで  
伝播している



慶一郎



常松



小林一家  
吉太郎





伝常松のこけしは頭頂花を抱く作並様式の菊を描く胴模様

# 崩れ桜の起源



第七图

木目



第六图

重ね菊



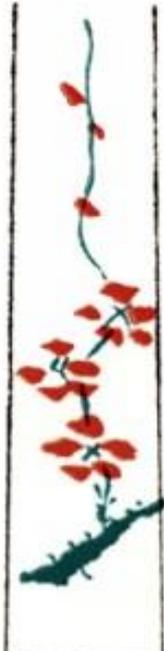
第五图

崩れ桜



第四图

旭菊



第三图

枝梅



第二图

梅花



第一图

井桁

石採子(大塚) 八十才 (模写)

奥州白石 石採子(大塚) 八十才

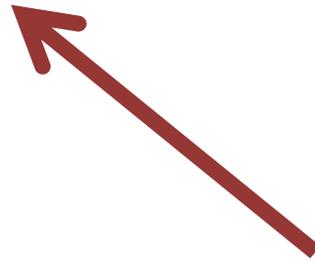
(模写)

# 菊から桜へ

作並古こけし



槻田与左衛門



崩れ桜へ

「桜崩し」ともいう



作並の蟹花



岩松亥之助に昔からの作並の模様を描くようにと言われて描き始めた謙蔵の蟹花

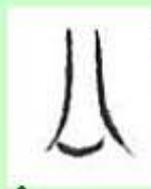
# 割れ鼻の起源

鼻の描彩の変遷  
(小人形以上のこけし)

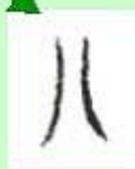
②丸鼻(垂れ鼻)  
撥鼻の簡略型  
(遠刈田、蔵王高湯)



①祖系となる撥鼻  
(蔵王東麓)



③簡略された割れ鼻  
(作並地方)



④発展した撥鼻  
飯坂の栄治、井上藤五郎  
(弥治郎、肘折)



⑤割れ鼻  
槻田与左衛門による導入  
(遠刈田、山形、作並地方)



⑥変形した割れ鼻  
平賀一家(作並)



上端を付けるほうが位置決めが易しい

↑ 二人挽き  
↓ 一人挽き





遠刈田古作こけし  
周右衛門一家  
高橋五郎蔵